

略解（問題のねらい）

問 1 < 要約力 >

[a] の要約

人間が真摯に自己形成していこうとするのであれば、幅広い読書が必要になる。読書の幅が狭いと、一つの考え方を絶対視して思考停止に陥りがちである。それは、堅くもろい自己のあり方だと言える。それに対して、幅広く読み続けていれば、思考停止せずに他者をどんどん受け入れていく柔らかさが身に付いてくる。矛盾しあう複雑なものを心の中に共存させることによって、総合的な判断を下すことができるような真に強靱な自己を形成していくことができるのである。

[b] の要約

読書は、他人にものを考えてもらうことであり、他人の考えた過程を反復的にたどることにほかならない。読書の際には、ものを考える苦労はほとんどない。それゆえ、まる一日を多読に費やす勤勉な人間は、しだいに自分でものを考える力を失っていく。大多数の学者は、多読の結果として愚者となった人間なのである。精神は、他人の思想によって絶えず圧迫されると弾力を失ってしまう。多読ではなく、読んだものを反芻し熟慮することこそが大切なのである。

問 2 < 読解力 >

偉大な思想家の書物を読むさいには、その人の物の見方考え方の本質をつかむことが大切である。本質をつかむことさえできれば、どこまでも詳しく読まなくても、この著者であればこういう問題についてはこのように考えるだろうということも見えるようになってくる。それゆえ、書物を読むときに、一つ一つの字句の正確な理解のみにこだわってしまうと、一つ一つの字句の理解は「精密」であるにしても、その背後に生きている著者の根本精神の把握がないがしろになってしまうという意味においては、「粗笨」になってしまうのである。

問 3 < 読解力 >

一人の作家の全集を読むと、その作家が、どんなに色々な事を試み、いろいろなことを考えていたかが分かる。そして、単純に考えていたその作家の姿は、この人にこんな言葉があつたのか、という驚きで、壊されてしまう。そうすると、我々は、テキストの表面に現れているものをそのままその作家の性格や個性とみなすのではなく、個性や性格をテキストの背後に求めるようになっていく。そうすると、ほんの片言隻句にも、その作家の人間全部が感じられるというようになる。このような仕方では、眼の前にある文の表面的な意味の背後に著者の真の姿を見出していくべきだというのが、「文は人なり」という言葉の真意である。

問 4

< 問題設定能力 >

< 問題解決能力 >

< 論述能力 >

< 具体的な読書経験 >